

## スタンフォード大学滞在記

寺 岡 寛

(中京大学名誉教授)

昨年12月半ばから3週間半ほど、米国カリフォルニア州にあるスタンフォード大学に滞在の機会を得た。スタンフォード大学はシリコンバレーのイノベーション人材供給の重要な拠点となってきたし、いまそうである。

大学の正式名称は、リーランド・スタンフォード・ジュニア大学である。この名称は、創設者のリーランド・スタンフォード(1824 - 1893)に由来する。スタンフォードはニューヨーク州生まれの弁護士で、当時のゴールドラッシュの下でカリフォルニア州へと移り、兄弟とともに鉱夫相手の雑貨店経営からビジネスの分野へと進んでいる。カリフォルニア人口の急拡大に目をつけた大陸横断鉄道への投資が莫大な富をもたらした。その後、スタンフォードはカリフォルニア州知事を経て、運輸会社や生命保険会社の設立や経営に関わった。当時は、ビジネスにおいても荒っばい時代である。これに関わるエピソードは毀誉褒貶の話も含めて実に多い。

彼自身は、ビジネスでの成功の下、15歳の一人息子を亡くしている。ジュニアは長く子宝に恵まれなかった夫妻の待望の跡継ぎであり、晩年の一子であった。家族旅行中のイタリアで、腸チフスで倒れた。夫妻は一人息子の名前を冠した大学を構想して、当時のハーバード大学の学長などにも相談し、1891年に現在の地に設立した。当時の写真には、立派な石造りの正門が写っている、だが、そこからの風景は森があるだけである。当時、だれも現在のスタンフォード大学の発展ぶりは予想できなかったにちがいない。スタンフォード夫妻の存命中、1920年まで大学の授業料は無償であった。スタンフォード大学付設のカンター美術館を訪れると、その一角にリーランド・ジュニアの

肖像画とともに、その遺品が展示されている。

スタンフォード大学は、パロアルト市(人口約7万人)に立地していると思われがちだが、人口2.1万人のスタンフォード市にある。住民のほとんどは学生や教員、研究員など大学関係者である。スタンフォード大学一期生として入学し、(1年次は、数学以外は単位を落としたという逸話)、地質学を専攻し、技師としてオーストラリアや中国で働き、その後、連邦政府の商務長官となり、大恐慌下の第31代大統領となったハーバード・フーバー(1874 ~ 1964)の名前が冠されたフーバートワーの展望台(およそ80メートルほど)からは、周辺に高層建築がないこともあり、この大学の広大なキャンパスが見渡せる。東京ドーム700個分の広さである。そこに点在する学部校舎・研究科建物の配置が手にとるようにわかる。ちなみに、フーバー研究所は、公共政策の研究所として1919年に設立されている。設立目的は、第一次世界大戦に関する収集資料の保管であり、その後も戦争に関する資料の収集は続けられ、その保管場所としてフーバートワーが1941年に建設されていた。フーバートワーの一階横の展示室もあり、その時期のテーマにそった特別展もある。

それぞれの建物には、多額の寄付者や著名な卒業生の名前が冠された建物も多い。もっとも成功した卒業生は、電気工学科のウィリアム・ヒューレット(1913 ~ 2001)とデビッド・パッカード(1912 ~ 1996)であろう。大学近くのパッカードのガレージで創業した小さな事業は、やがてヒューレット・パッカード社へと発展した。同社はシリコンバレーとスタンフォード大学を結びつけたイメージをかたち作った。キャンパスには、「シリコンバレーの礎」の説明パネルが設置さ

れている。「スタンフォードは、コンピューターサイエンス学部を設立した最初の大学のひとつであり、現在はゲーツ・コンピュータサイエンス学舎となっており…」とある。ヒューレットたちが学んだ時期の「工学部長のフレデリック・ターマン（1900～1982、スタンフォード卒業生）は学術界と産業界の間に生産的な相乗効果を育み、シリコンバレーの学術的構築者と見なされている」と紹介される。

ターマン自身もそうであったが、地元で就職先を欠いたために東部での職を求めた。若いころのこうした傾向を変えるために、ターマンは教え子たちにスタンフォード近くでの起業を盛んに説いた。電気工学科の校舎にはデビッド・バックードビル、その反対側の校舎にはウィリアム・ヒューレット教育センター・ビルがある。電気工学科の歴史的な歩みを展示した説明パネルとともに、ガレージ創業時の写真とヒューレットたちの最初の頃の製品（部品）が現物展示されている。いずれも単に学術上の研究だけでなく、ビジネスへの応用を強く意識させる工夫がなされている。学生たちが一階の展示パネルをみながら二階などへの教室へと駆け上っていく姿をみていると、日本の殺風景な校舎内部とはまた異なった雰囲気がある。

スタンフォードは大学院教育を中心とした大学である。たとえば、約 16000 人のうち、学部生は 7000 人余りで、大学院生は 9000 人を超える。学内を歩けばすぐわかることだが、社会人学生もさることながら、留学生も多く、70 개국以上から 4000 人を超える学生が学んでいる。学内に点在するカフェテリアに行けば、学生の多様性が一目瞭然だ。大学院教育・研究中心のスタンフォード大学にとって、潤沢な研究資金の確保が重要である。事業家や卒業生からの寄付金や資産運用収入から構成されたスタンドフォート大学基金は 3 兆円に達しようとしている。大学の運営予算は日本の大学と比べられないほど多額である。いずれにしても、世界各国から潤沢な奨学金や研究資金で優秀な大学院生やポスドク研究員を集め、将来性のある先端分野（Invest for future）の研究にチャレンジしている印象が強い。

寄付金ということであれば、米国の寄付文化がここでも息づいている。先ほどのコンピュータ学科へ、ウィリアム（ビル）・ゲーツ（1955～）が何回にもわたりかなりの額の寄付を行っている（学科の校舎にはビルゲーツの名前が刻まれている）。ほかにもスタンフォードの卒業生ばかりではなく、創業企業家が多額の寄付

を行っている。ナイキの創業者もフィリップ・ナイト（1938～）も数億ドルの寄付を行っている。彼の卒業した経営大学院は、現在ではナイト経営大学院となっている。スタンフォード卒業生でヤフーの創業者ジェリー・ヤン（1968～）の名前の冠された校舎（日系の山崎晶子との共同名称）もある。この種の建物の名称から、この大学が多くの創業企業家を生み出したことが分かる。

最近の大口寄付者といえば、70 年振りの新学部となったスタンフォード・ドア・サスティナビリティ学部である。既存の建物を利用しているので、多額の寄付が行われたとは思えないが、実際にはシリコンバレーの最も成功したベンチャーキャピタリストといわれるジョン・ドアが夫人のアンとともに 11 億ドル（1500 億円以上）を寄付した。他に 5 億ドル以上の寄付金も集まったというから、日本とは比べようもない学術資金の規模である。ただし、建物一階の展示物は他の校舎と比べても地味であり、気候変動や地球科学がイメージされている。講師陣をみると、エネルギー、食と安全、自然環境一般などが対象分野となっているようである。

スタンフォード大学とシリコンバレーとの関係は、パロアルトやサンノゼ、マウンテンビュー、クパチーノなどに立地するベンチャービジネスから大きく成長した企業群をみればすぐに理解できる。機会があれば、こうした点についても私の現地観察を紹介したい。